

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：25406

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2022

課題番号：15K02223

研究課題名(和文)大庭賢兼の文事を視点とした毛利氏・吉川氏の文化活動再評価のための基礎的研究

研究課題名(英文)A Study of the Cultural Achievements of Oba Katakane as a Vassal of the Mori clan in Sengoku Period

研究代表者

西本 寮子(Nishimoto, Ryoko)

県立広島大学・地域創生学部・教授

研究者番号：70198521

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、大内氏の旧臣で後に毛利氏に取り立てられた大庭賢兼の文学的事績を明らかにするとともに、戦国武将としての活動と文化的活動を重ね合わせることで、毛利氏が大内氏から引き継いだ文化遺産や文化活動に対する考え方やその特徴を明らかにすることを目的とした。大内氏配下の国人領主毛利元就が戦国大名として急成長する過程にあつては、経験と素養の上に和歌を学ぶ賢兼のような人材が必要であり、賢兼が毛利氏内部で果たした役割は小さくない。従来の大庭賢兼に関する資料の読み直しを進め、これまで知られていなかった資料の伝存の確認ができたことで、毛利氏の文化戦略ともいべき文化活動の一端を解明できたと考えている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究においては、毛利元就が大内氏の文化的遺産をどう継承し、奉行人として取り立てた大庭賢兼にどのような役割を期待したかという課題の解明を目指した。その結果、賢兼が戦国大名として急成長を遂げた毛利氏の人材育成と文化戦略の中心にいたこと背景に、賢兼の詠歌活動と教養は大内氏奉行人時代に培われたものであり、その力量と卓越した事務処理能力を評価されて元就に取り立てられたと考えられることが、資料的裏付けを伴って確認できた。このことは毛利氏の文化戦略の検討において、貴重な成果のひとつといえる。歴史学研究成果と併せ考えれば、毛利氏の文化戦略の研究にとどまらず、大内文化の再評価にも資する研究である。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to summarize the cultural activities of Oba, a vassal of the Sengoku daimyo Mori, and to clarify the role of the Mori clan. Oba Katakane is one of Mori Motonari's most trusted retainers. He was not only a military commander, but the most important figure in the Mori clan's cultural strategy. It is important that Motonari's trust is based on his knowledge of waka poetry and his work as a poet, which he acquired during his time as a vassal of Ouchi. Motonari highly valued his talent as a poet, so he made him learn more about waka poetry and made him a central figure in the Mori clan's human resource development and cultural strategy. By researching his waka poetry, I have clarified a part of the Mori clan's cultural activities, which could be called a cultural strategy.

研究分野：日本文学

キーワード：大庭賢兼 毛利元就 毛利氏文化圏 大内文化

機関番号：25406  
研究種目：基盤研究(C)  
研究期間：2015～2022  
課題番号：15K02223  
研究課題名(和文)  
大庭賢兼の文事を視点とした毛利氏・吉川氏の文化活動再評価のための基礎的研究  
研究課題名(英文)  
A Study of the Cultural Activities of Oba Katakane as a Vassal of the Mori Clan in Sengoku Period  
研究代表者  
西本 寮子(NISHIMOTO Ryoko)  
研究者番号：70198521  
交付決定額(研究期間全体):(直接経費)3,000,000円

**研究成果の概要(和文):**

本研究においては、大内氏の旧臣で後に毛利氏に取り立てられた大庭賢兼の、戦国武将としての活動と文学的事績を重ね合わせることによって、毛利氏が大内氏から引き継いだ文化遺産や文化活動に対する考え方やその特徴を明らかにすることを目的とした。大内氏配下の国人領主として毛利元就が身につけていた必須教養を基盤としつつも、毛利氏が戦国大名として急成長する過程にあっては、自らが関与するのではなく、和歌を学び、『伊勢物語』や『源氏物語』の講釈を中央の貴顕から学び、諸注集成を作成した賢兼のような人物が必要であった。大内氏旧臣賢兼が毛利氏内部で果たした役割は小さくない。大庭賢兼に関する資料の読み直しを進め、これまで知られていなかった資料の伝存の確認ができたことで、毛利氏の文化戦略ともいべき文化活動の一端を解明できたと考えている。

**研究成果の学術的意義や社会的意義**

本研究においては、毛利元就が大内氏の文化的遺産をどう継承し、奉行人として取り立てた大庭賢兼にどのような役割を期待したかという課題の解明を目指した。その結果、賢兼が戦国大名として急成長を遂げた毛利氏の人材育成と文化戦略の中心にいたこと背景に、賢兼の詠歌活動と教養は大内氏奉行人時代に培われたものであり、その力量と卓越した事務処理能力を評価されて元就に取り立てられたと考えられることが、若干ながら資料的裏付けを伴って確認できた。このことは毛利氏の文化戦略の検討において、貴重な成果のひとつといえる。歴史学研究成果と併せ考えれば、毛利氏の文化戦略の研究にとどまらず、大内文化の再評価にも資する研究である。

**研究成果の概要(英文):**

The purpose of this study is to summarize the cultural activities of Oba Katakane, a vassal of the Sengoku daimyō Mōri, and to clarify the role of the Mōri clan. Oba Katakane is one of Mori Motonari's most trusted retainers. He was not only a military commander, but the most important figure in the Mori clan's cultural strategy. It is important that Motonari's trust is based on his knowledge of waka poetry and his work as a poet, which he acquired during his time as a vassal of Ouchi. Motonari highly valued his talent as a poet, so he made him learn more about waka poetry and made him a central figure in the Mori clan's human resource development and cultural strategy. By researching his waka poetry, I have clarified a part of the Mori clan's cultural activities, which could be called a cultural strategy.

研究分野：日本文学

キーワード：大庭賢兼、毛利元就、毛利文化圏、大内文化圏

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

毛利元就を中心とする毛利氏の文化については、大内氏文化圏で培われた文化、典籍、気風を受け継いでいることもあり、早くから知られ、その重要性については注目されてきた。しかしながら、『源氏物語』の伝本群を中心とする一部の典籍類の伝来に、多くの研究者の注目が集まる傾向にあった。また、毛利元就の次男である吉川元春の書写による『太平記』が、『太平記』研究の深化に大きく貢献してきたところである。こちらも多くに関心を集めてきた。このように、毛利氏周辺の文化的事績については、早くから知られ、課題が認識されてきたものの、歴史学研究成果と文学研究成果の繋ぎ合わせは十分ではなかった。

そこで、これまで個々に積み重ねられてきた研究成果と、申請者がこれまでに参加した日本史と日本文学の研究者による共同研究成果などを踏まえ、とりわけ、大内氏から毛利氏へと主家を変え、毛利氏の中樞奉行人として活躍し、『源氏物語』の享受史にも名を残す大庭賢兼に焦点を当てることとした。具体的には、賢兼の活動と事績に注目し、毛利氏とその周辺の文化的活動の再整理、及び大内氏から受け継いだ文化的事績の再整理と文化継承の実態の解明をめざしたのである。

## 2. 研究の目的

大庭賢兼の文学的事績の再整理と未翻刻資料の翻刻等を通じて得られた情報をもとに、大内氏から毛利氏へと主家を変え、好学で知られる吉川元春の息である元長らとも関わりを持ちながら戦国の世を生き抜いた一武将の文化的活動の実態の解明をめざすとともに、一人領主から戦国大名へと急成長を遂げた毛利氏にとって、所謂文化活動がどのような意味を持っていたのかを探ることを目的とした。賢兼の事績を起点として、文化政策という視点から毛利元就を頂点とする毛利氏の文化活動のありようを、今に伝わる関連資料 典籍と関連資料及び古文書等 による裏付けを、可能な限り取りながら、明らかにする試みである。

## 3. 研究の方法

研究開始時には、研究方法として、次の3点を、年を追って進めることを予定していた。

- (1) 井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町後期』、米原正義『戦国武士と文芸の研究』、大津雄一『伊勢物語古注釈の研究』で解明されていたこととそれ以後の研究成果を整理することに加え、拙稿「宗分「源氏抄」(仮称)成立までの事情 毛利元就との関係を軸として」(『国語と国文学』78 - 12、2001年)以後の、毛利氏及び吉川氏の文事に関連する研究の進展、研究情報の整理を行う。
- (2) 大庭賢兼の事績であることが知られている資料には、すでに翻刻されている資料として「宗分家集」「元治三年六月六日和漢聯句」がある。また、井上宗雄氏により紹介されてはいたが未翻刻であった「詠百首和歌」、「源氏物語」(宗分源氏抄)、「伊勢物語口伝抄」等がある。これらの資料及び毛利家・吉川家文書のほか、諸機関に所蔵されている大庭賢兼関係資料) についての情報整理を行い、可能な限り調査に着手する。
- (3) 上記資料について、可能な限り翻刻または解読を進めるとともに、毛利家文書等の読み直しをすすめ、収集した情報とつきあわせて考察を深める。
- (4) 得られた成果については論文にまとめ、公表する。

## 4. 研究成果

当初の研究計画は、コロナ禍の発生と長引く行動制限による資料調査及び情報収集に大きな制限を受けたことから変更を余儀なくされた。しかしながら、積み重ねられてきた先行研究及び近時明らかになった研究成果を参考にしながら、二度の研究期間延長を経て収集資料の読み直しを行った結果、当初想定していなかった成果を得ることもできた。それらを含めて、今後も研究を続けていくが、この研究期間に得られた主な成果を以下に列記する。

- (1) 『源氏物語』(天理大学附属天理図書館蔵30冊本。「源氏抄」と呼称)については、巻末の識語に3つのパターンがあることを確認した。併せて、各巻の筆跡とこの識語のパターンが対応している可能性が高いこともある程度確認できた。この点については、近年、まとまった研究成果のひとつとして刊行された菅原郁子『源氏物語の伝来と享受の研究』(2016年、武蔵野書院刊)でも触れられていない。賢兼(出家して宗分)の注釈は元就没後から始まり、天正10年ごろまで少しずつ加筆されたものであるが、その基盤となった本文の入手は元就生存中であることは疑えない。戦国大名として、各地への出陣と関わって戦陣を構えていた地での活動に関わる可能性があるという仮説を立てている。この検討結果と『元就詠草』に見られる、『源氏物語』書写に関わる詠草、詞書との対応関係についてはさらなる検証が必要であるが、毛利氏の動向と重ねてさらに考察を深めることで、賢兼の『源氏物語』入手ルートの推測が可能になると考えている。近年進んだ歴史学研究成果とも重ね合わせて、継続して検討を進めたい。
- (2) 『宗分歌集』(山口県文書館蔵)は江戸時代後期の書写になる孤本であり、元就が亡くなった後の供養の様子を歌で綴った小品である。孤本であることから異同や不審箇所の検証は

困難であったが、今回の研究の過程で、二首の歌の脱落の可能性が判明した。吉田の地において焼香した道澄詠を含む二首である。後世の編纂資料「四代実録」に書き留められた記載からの推測ではあるものの、貴重な発見であると考えている。

- (3) MOA 美術館所蔵の古筆資料のなかに賢兼自筆の短冊一葉が現存していることが、佐々木孝浩「守護大名大内氏関連和歌短冊集成(稿)」(『斯道文庫論集』50 輯所収、2015 年)に指摘されている。これについては、所蔵機関が発行した図録『珠玉の書 短冊手鑑の世界』(年刊)においても所在を確認したが、諸事情により原資料は未見である。賢兼が大内氏の奉行人であった時期の資料として貴重である。同様に、もう一葉、賢兼自筆の短冊が「前田家伝来古筆短冊手鑑」に収載されていることを確認した(『収藏品目録 書跡 前田家伝来『古筆短冊手鑑』』宮内庁三の丸尚蔵館、2021 年刊)。こちらも原資料は未見であるが、いずれも大内氏奉行人時代の詠であることはほぼ間違いない。賢兼が毛利元就に取り立てられる前、大内氏奉行人としての活動を知る上で貴重な資料の現存である。賢兼は、大内氏滅亡後、毛利氏の中樞奉行人として元就の政策ブレーンなどを務める一方で、その力量を高く評価されて作歌活動を続けたと思われる。その目的は何か。永禄 11 年ごろ、すなわち毛利氏の一員となったのちにまとめたと思われる『詠百首和歌』との関係については、さらなる精査が必要であるが、賢兼の文書管理経験、優れた事務遂行能力と詠作活動が決め手であったと見なされる。賢兼を毛利氏の文化戦略の中心に据え、人材育成と文事による外交推進の要とするのが第一の目的ではなかったか。この仮説をもとに、現時点までの成果の一端を、論考「大庭賢兼の文事 毛利氏登用の契機をめぐって」にまとめた(2023 年 7 月刊行予定『平安時代の和歌と物語』所収)。
- (4) 近世の転写本であるが、永禄 11 年頃にまとめられたとされる『詠百首和歌』(カリフォルニア大学パークレー校所蔵、国文学研究資料館マイクロフィルムによる)は未翻刻資料である。自筆資料ではないこともあり、井上宗雄氏や米原正義氏による「好古の武将の典型」という評価の実態の検証や妥当性の評価の検討はなかなか進まなかった。「好古の武将」であるという評価自体は見直す必要はないと思われるが、毛利氏の奉行人としての具体的な活動と詠作を重ねてみると、毛利氏内部における立場については、再検討の余地があると考えた。(3)に記した検討結果、及び大内氏、毛利氏に関わる歴史学研究的進展により明らかになったこと、あるいは大内文化の継承の視点を考え合わせてみると、従来の考え方 毛利元就に取り立てられたのちの元就との関係の深さによってまとめられた百首である をさらに一歩推し進めて、大内氏の奉行人時代の職務、力量と評価を基盤とした毛利氏の文化戦略の中心人物であることを検討する必要があると考えるに至った。特に永禄 6 年前後の活動実績から天正年間の活動を見ると、毛利氏の文化戦略の最先端で活動をしているように思われる。未だ十分な考証と考察はできていないが、今後継続して検討したい課題である。
- (5) 東海大学附属図書館桃園文庫に所蔵される、賢兼(宗分)の手になる『伊勢物語』諸注集成については、コロナ禍以前に数年かけて調査を進めていたが、コロナ禍により中断せざるを得ず、残念ながら、研究期間中に再開するに至らなかった。ただ、大津雄一が指摘したように、三箇の秘事を伝授されたことは、その記事からほぼ確実であることは確認した。また、賢兼の特性に配慮した講釈が行われ、それを書き留めたのではないかとということまで考察したところである。しかしながら、当該資料単独で評価するよりも、広い意味での毛利氏文化圏の中で『伊勢物語』がどのように受け入れられていたか、どのように教養形成に活用されたかという視点で検討し直す方が有効ではないかと考えるに至った。次項に記載することと併せて、さらに考究したい。
- (6) 吉川史料館に所蔵される吉川元春書写『太平記』については、『太平記』研究者による行き届いた研究がある。しかしながら、全体を通して、3種の書き込み線が施されていることについて具体的に言及した先行研究は見出していない。おそらく吉川元長による書き入れであると思われる。元長は吉川氏の一員として、元就の指示を受け最前線で戦うなかで、禅僧との関係が深く、心情を吐露した書翰を多く残している。そして、諸宗兼学の施設「万徳院」の建立に腐心したことで知られる。吉川家文書等から窺われる元長と賢兼の接点や知識、教養のありようを重ね合わせると、その文芸への傾倒、学問への志向の特異性が際だててくるように思われる。本研究期間においては基礎的作業にとどめざるを得なかったが、広い意味での毛利氏文化圏の文化的活動の実態の解明をさらに進める必要があると考えている。
- (7) 研究の最終段階で、下関市立歴史博物館に所蔵されている「元就詠草」の内容を調べる機会を得た。公的な詠草ではなく、和歌創作のための覚書と推測される資料であるが、自筆の可能性が高い。『古今集』収載歌ほか複数の勅撰集や私撰集からの抜き書きをしたとすれば、元就の周辺にどのような和歌資料があったのかを検討する際の参考になる資料との出会であった。

以上が、2 回の研究期間延長を経ての研究成果の概要である。断っておかなければならないのは、長期にわたる考察及び見直しの最終段階で、大庭賢兼の活動について、毛利氏に取り立てられて後の事績及び元就から得た信頼に基づく活動に目を奪われ過ぎていたことに気づいたことである。伝存が確認された短冊二葉がともに大内氏関連の資料の中に見いだされたこと、そして、大内氏が長年にわたって蓄積してきたさまざまな文化遺産、と

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

りわけ大内政弘以降の大内文化の研究の進展と深化を知ったことによるところが大きい。賢兼の文化活動と中枢奉行人としてのあり方が、毛利元就を主とした後に培われたものではなく、大内義隆を主としていたところからの奉行人としての活動、作歌活動に基づく者であると確信するに至ったのである。

全体としては、遅々たる歩みにすぎずわずかな成果であったが、得られた成果をもとづき、2023年から2024年に公表を予定している論考や口頭報告等にこれらの成果の一端を、必要に応じて再調査を行いながら盛り込む予定で、準備を進めている。また、本研究の終了の後に引き続く形で2023年度から始まる新たな研究組織への参加により調査と考究を続け、この間明らかにしえなかった課題に取り組みたい。

5. 主な発表論文等

「大内氏旧臣大庭賢兼の文事 毛利氏登用の契機をめぐって」(下記参照)のほか、口頭報告(2023年8月予定)、論考一編(2024年刊行予定の単行本に所収予定)による成果の公表を予定している。2024年度以降も、準備が整い次第、研究成果を公表する予定である。

[雑誌・単行本掲載論文](計1件)

・「大内氏旧臣大庭賢兼の文事 毛利氏登用の契機をめぐって」(吉海直人編『平安朝の物語と和歌』所収、2023年7月、新典社刊、ISBN:978-4-7879-4364-4、305-317頁)

[学会発表](計0件)

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況 なし(計 件)  
取得状況 なし(計 件)

[その他]

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1)研究分担者 なし

(2)研究協力者 なし

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

西本寮子「大内氏旧臣大庭賢兼の文事―毛利氏登用の契機をめぐって―」（吉海直人編『平安朝の物語と和歌』所収，2023年7月，新典社刊，ISBN:978-4-7879-4364-4）に成果の一部をまとめた。また、2023年度から2024年度にかけて口頭発表や論文発表を予定している。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------